

エチカ・トレイン

野口津義夫

哲学的ロマン小説の原点と秘密

善悪点数表を書き記す孤独な青年をモチーフとした中編『エチカ・トレイン』、哲学的ロマン小説の定義をクリアしている濃厚な短編『尖塔の番人』、そして人間の心の奥底に潜む悪魔主義的な情念を描いた短編『サクラ卍土手』を収録。

もくじ

エチカ・トレイン 2

尖塔の番人 122

サクラ卍土手 149

あとがき 184

エチカ・トレイン

序

「先生は、なぜ哲学を研究するようになったのですか？」

うらかな春の日のキャンパスで、この四月に入学したばかりの一人の女子学生が尋ねた。定年間近の教授は一瞬躊躇ったが、微笑んで言った。

「それには勿論、わたしなりの訳があります。知りたいですか？」

教授は毎年、哲学科に新しい学生が入って来る、この時季が一番嬉しそうだった。

「ええ、是非」

すると近くにいた彼女の友達が数人、真理を刻印したような彫りの深い顔の、この教授の周りに集まって来た。教授は、自分が学生だった頃のキャンパスと二重写しにして、自分の周りに笑顔で立っている背の高い彼女達を見て、改めて時の流れを感じ取った。

「しかし・・・」

教授は前途有望な彼女達を前にして、少し勿体ぶって言葉を濁した。

「わたしね、砂田先生に、どうして哲学の道に進まれたのか、お聞きしたところよ。みんなも興味があるでしょう」

その女子学生が、みんなに事の次第を説明した。

「ええ」

「勿論」

「あるある」

彼女達の目が輝き、教授を取り巻く輪が縮まった。

「これは困ったな……」

実際、教授は困っていなかった。ただ、これから始まる近世哲学史の講義に行かなければならなかった。

「しかし、その質問に答えるには、最低でも一時間は掛かります。それは、ちょうど『哲学とは何か?』と聞かれているようなものです。ですから、四時限以降なら空いていますから、わたしの研究室まで来てください。その時に、みなさんにお話ししましょう。他にも興味のある方がいたら誘ってきてください。どうせ、あなた方も、これから講義を受けに行くんでしょう?」

「はい。わたし達、これから一般教養の物理学を受けに行くところですよ」

「それも世界の構造について知るために必要です。では後で——」
そう言って、教授は3号館の方に歩いて行った。

砂田教授の研究室は、哲学研究室と同じ棟の四階にあった。集まった学生達は、教授の振舞ってくれたコーヒーを飲みながら、彼の話に胸をときめかせた。教授は、真理を語るには、ちよつと悲哀の籠もった顔をして、

「実は、初めは哲学を研究するなんて、全く考えてもいなかったんですよ」と言った。みんなは意外そうにして、彼の話に耳を傾けた。

「それは、ある事件が切っ掛けだったんです。もう何十年も昔のことになりますが、わたしは大學を卒業して、いったん就職したんですが……」

ちよつとコーヒーを啜った後、遠くを見詰めるようにして教授が語り始めた……。

一

左の頬を枕に当て、うつ伏せになって寝ると、心臓の音がうるさくて眠れない。砂田は寝返りを打った。幼い日のことが思い出された。

小学校三年の時、校舎の三階から飛び降りた信雄は、二階近くまで降り積もった雪の新鮮で柔らかな感触の中で、自分だけの空想の世界に酔い痴れていた。

信雄は大雪原の中を一人で歩いてきた。そして偶然、一羽の美しい鳥を発見した。それは真っ白い鳥だったので、周りの雪に紛れて判別が付かないはずなのに、どうして自分が分かったのか不思議に思った。その瞬間から信雄は、その鳥を追い掛けて捕まえないければならない義務を感じた。なぜだか分からない。どうして自分がそのような気持ちになったのか？ たぶん退屈だったのだから。しかし、その鳥の嘴が赤い色をしていたのに気付くと、自分を犯罪者のように感じた。その嘴は、人通りのない夜、男に付けられている女の口紅に似ていた。とすると、さっきの義務感は偽りで、追い掛けて捕まえる誘惑を感じたというのが本当だろうか。信雄は、その鳥を追い

掛けながら、行けども行けども限らない大雪原に酷似した誘惑の無限性を感じた。

どのくらい時間が経ったのであろうか。長い冬が終わって、うららかな日差しの下に懐かしい大地が散見される、春の到来を思わせるような場所にやって来た。一瞬見えなくなった鳥は、木立に囲まれた白い小さな家から、仙人らしき風体をした一人の老人に伴って現れた。老人は、少年の心を吟味するかのような口調で言った。

「坊や、どうして、そんなに執拗に、この鳥を追い掛けて来るのかね？」

信雄は返答に困った。子供らしく、「僕、鳥がとても好きなんだ。だから夢中で追い掛けて来てしまったんだ」とでも言えばよいのに、老人の度肝を抜かしてやるような会話の獨創性を考えていた。相手を驚かすことは、即ち創造性であると知っていた信雄は、突然誇らしげに次のように言い放った。

「僕、その鳥を捕まえて食べてみたいと思ったんだよ。だって、こんなに美しい鳥を見たことはないんだもの——」

少年の予想どおり度肝を抜かれた老人は、この少年の行く末を恐れて、

「何事も美しいほど味がよいという、老境において初めて悟る真理を最早知ったのだから、思い残すことはあるまい！」

と言つて、いきなり少年の胸に、その鳥が運んで来た短刀を突き刺した。少年は痛みにも悶えて、再び大雪原の中によるめき入った。真っ白い雪に真っ赤な血が滴り落ちた。

「信雄ちゃん、どうしたの。どこか怪我したの？」

という声で、信雄は我に返った。日頃、信雄に好意を寄せている同じクラスの早苗が、心配そうな顔をして信雄の顔を覗き込んだ。空想のクライマックスにいた信雄は、それを破られた悔しさに早苗の顔に手で雪を払い、

「あっちへ行け。お前みたいな奴には用はない！」

と言った。早苗は激しく泣き出した。成績は中位だったが、クラスで一番の美人だった早苗は、これまでも何度か信雄に泣かされたことがあった。

「信雄ちゃんの馬鹿！」

と言つて、歩行困難なほど積もった雪をかき分けて、早苗は泣きながら姿を消した。改めて自分の冷たさに驚いた信雄は、自分の悪事の原因を、空想の中に現れた老人のせいにした。下方から、早苗のまだ泣いている声が聞こえてきた。

「早苗ちゃん、ごめんよ」

と、砂田は枕元で思わず声を出して言った。そして、二十年も前のことに反省の色を示して、感傷に浸っている自分に呆れた。今度は誰のせいにするのか？誰のせいにもしなかった。考えてみれば、人生の一ページに誰しも一つや二つ持っている美しい思い出ではないか！砂田は、思いがけなく正直になっていて自分を不審に思い、これも静かな秋の夜の魔力と違って意識を制しなかった。すると、また別の思い出が蘇った。

三歳で幼稚園に入園した信雄にとって、園内の全てのものが珍しく、新鮮なものとして感じられた。ブランコ、滑り台、鉄棒、そして花壇……。これらはみんな、自分の家にはないものであった。

「天にまします我らの父よ、願わくは……」カトリックの幼稚園だったので、食事の前は必ず、この文句を言うことが義務付けられていた。園長先生は日本人であったが、レットルという名の少し太った丸い眼鏡を掛けた女の先生だった。

入園して間もない日のことであつた。いつも変な服を着ているレットル先生に向かつて、

「レットル先生、先生は、お空から来たんでしょう。僕、知ってるんだ」

と、信雄は得意げに言つた。レットル先生は驚いて、

「信雄ちゃん、よく知ってるわね。先生だけじゃなくて、人間はみんな、そうなのよ。神様が、みんなをお造りになられて、天上から、この地上に降ろしてくださつたのよ」

と言つた。その時、信雄は夢中で言つた。

「嘘だい、そんなこと！僕は、お母さんから生まれたんだよ。レットル先生は、お空のカラスだつたんでしょう。だから、そんな黒い洋服を着てるんでしょう？」

レットル先生は朗らかに笑つた。そして、その笑いに呼応するかのようにな、軒下の氷柱が、晴天の日に溶かされて大地に落下した。

ようやく幼稚園の生活にも慣れた、ある爽やかな天気の良い日のことだつた。帰り際にレットル先生が、様々に彩色した茹で卵を小さな紙の箱に入れて、園児一人一人に配つて回つた。卵は白いものと思ひ込んでいた信雄は、青色をした茹で卵を受け取つて呆然とした。勿論、それは幼稚園の先生達によつて、その箱と一緒に絵の具で奇麗に塗られただけのものではあつたが、信雄にとっては、その後の精神生活に多大な影響を及ぼした一つの事件であつた。現に、その後数週間、

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。